

▶初めての地、リスボン

なんとか週に一度は先生について初級読本の学習に励んでいても、遅々としてエスペラントの進歩が自分の中では感じられません。しかし時々、「おや、少しは進歩したかな」と思うこともあるのです。

エスペラント世界大会に一度は参加したい。しかし語学レベルは初心者(Komencanto)で「エスペラントは話せないし、聞いてもわからないしなあ」と思い、なかなか腰があがりません。それでも去年はソウルで世界大会があると聞いて参加しようかと思いましたが、結果的には参加しませんでした。ソウルは仕事で5、6度は行ったことがあり、新鮮味が感じられなかったのです。

しかし今年は、ポルトガルの首都リスボンでの第103回世界大会です。エスペラントが喋れるようになってから参加しようと思っていたら、「いつまで経っても参加できませんよ。参加してだんだんと話せるようになるんです」という先輩の声。それに、「まず世界大会を体験してみなきゃ」という友人の声に押されて、参加してみようと考えました。また、リスボンというのは一度も足を踏み入れたことはなく新鮮味もありました。リスボンなんてこういう機会でしか行くこともないのではないか、ということもありました。

ということで初めて世界大会に参加したのです。

海外で開催されるエスペラントの会合はいくつもあります。最大の世界大会は、世界エスペラント協会(UER)が主催する世界大会です。その大会にはたくさんの分科会があり、言ってみれば文化祭、大学祭を想像していただければと思います。

その分科会の一つに初心者に教えるクラスがある、というのです。そこへ入れば「同じ初心者同士、仲良くなれますよ」という声も聞こえてきて、まずこ

れに参加しようと思いました。

▶ドバイ経由でリスボンへ

日本から行く多くのエスペランティストは、一般財団法人日本エスペラント協会主催のツアーがあり、それはアムステルダム経由でリスボンへ入ります。しかし旅費が高い、というので前々から親しくしている田平正子さんから「安いルートがあるんですよ」と言われていました。

田平正子さんは京都市在住の大ベテランのエスペランティスト。アフリカでのエスペラントの会合にも夫の稔さんと参加するほどの女性です。私が40年ぶりにエスペラントを再開して出会った方ですが、なかなかユニークなご婦人で、もう30回近く世界大会に参加している方であり、世界大会やアジア大会にいつも参加しています。今回は英語教師の稔さんとの参加です。年齢はご本人も公言していますから、公表していいでしょう。70代半ばですが、実にエネルギーにエスペラント活動をしている方なのです。

私が正子さんに、「おんぶしてもらって大会に参加しますから、よろしく」とメールを送ると、「お互いにおんぶし合っこしましょう」と返事をくれる方でもあります。正子さんがいるからこそ、私も大船に乗ったような気分になりました。

正子さんの言う安いルートは、ドバイ共和国の飛行機でドバイ経由のリスボン行きです。京都からは田平夫妻、それに私とほぼ同世代の木元靖浩さん、関西人特有の味わい深いユーモアのある男性、それに若い宮澤賢治研究家の富田成美さんの4人が関西空港から出発。私は成田空港から出発してドバイで落ち合うことになりました。

▶さわやかなリスボン

7月26日(木)午後10時、成田を出発、翌日

第27回 エスペラント世界大会に初参加(I)

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるい よしひろ)

混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ！」

27日(金)現地時間の3時40分、ドバイ空港に到着。そうして京都からの4人と落ち合い、7時25分ドバイを出発、12時35分リスボンに予定通り到着しました。

リスボン空港から我々が泊まるホテル、VIP Inn Bernaへ地下鉄で行きました。これ以後、リスボンではほとんど地下鉄を使って行動しました。

旅装を解き、一休み。その後、ホテルの周囲を仲間と歩きながら、夕食を取るべくレストランを探しました。周囲はテラス風の店で軽食以外にはありません。そうして歩いていると、アジア系の褐色肌の青年がうちの店に来ないかと誘いました。他に入りたくないような店もなく、結果的にその店に入りました。

ネパール人たちが経営する店でした。東京でもネパール人たちは活躍しています。東京のインド料理屋はほとんど、八割はネパール人が経営者だとか。ネパールはヒンズー教文化圏でもあり、ネパール料理と言ってもその主流はインド料理なのでしょう。それにしてもヨーロッパの西の果て、リスボンにまで進出するネパール人のたくましさには大したものだと思います。

その夜、一眠りしたら、足がつってきました。東京でも歩き過ぎたり、疲れた時などたまに足がつりますが、左足が多く、たまに右足がつることはあっても、両足がつるということはまずありません。ところが両足の脛のところが同じようにつるので、参ってしまいました。ひとりで寝ているので大きな声を挙げてもいいのですが、両足をつっていて大きな声をあげられません。すぐにエコノミー症候群だと思いました。

二日がかりのエコノミークラスでの機内。ほとんど足をリラックスすることもなく、まさか両足同時につるなんてと思いつつ、ひとり足をマッサージしてやっと痛みは治まりました。それ以後気がつけば、ふくらはぎをマッサージしました。それもあってか、以後まったくつることはありませんでした。

➤ **ビザが下りなかったパキスタン人**

翌日、大会初日の会場、まず受付を済ませ、「KONGRESA LIBRO」という大会の概要、分科会

の内容や日程などを詳しく紹介した130頁ほどの冊子を受け取りました。事前に正子さんから、ある程度内容を聞いていたこともありましたが、改めて参加したい分科会などをチェックしました。まず初心者のための講習会が、大会3日目の7月30日(月)から毎日2時間近く、5日目の8月3日(金)まで7回ほどありました。私は関心のある他の分科会に参加したいので、結果的に二日間、計4時間ほどしか出席しませんでした。

今回、分科会にスーフイズムについての会があるのを知り、興奮しました。スーフイズムというのは簡単に言えば、イスラムの神秘主義というものです。

現代バレエの振り付け師、演出家として有名なモーリス・ベジャールに関心をもっていた私は、彼の思想遍歴に触れ、マルクス主義からいろいろ変転したあげく、最終的にベジャールはスーフイズムに行き着いたということを知り、いたく興味を持ったという実に簡単な理由です。

日本語に訳されたスーフイズムに関する書籍を二冊ほど持っており、読んだことはありますが、とりわけ頭に入っているわけではありません。それがここリスボンでの分科会で45分ほど講義があるというので驚きました。今回リスボンにやってきた甲斐があったものと期待に胸ふくらませ、8月3日(金)午前9時にその部屋に行きました。20人ほどの人が集まりました。

ところが司会者が、話すべき人がパキスタンから来る予定だったが、ビザが取れず、リスボンに来られなかったというのです。仮に、彼がエスペラントで話しても、私の語学レベルでは理解はほど遠いでしょう。ちゃんと日本語での著作を読んだ方が理解が深まるということがわかっているにもかかわらず、本当にかっかりしました。ビザが取れなかった理由はわかりませんが、近年のイスラム過激派への警戒がこんなところに出ているのではないかと私は勝手に想像したりしました。

真相が那邊にあるかわかりませんが、どこの国に行こうがほとんどノービザで出かけられる日本国籍者にとっては少しばかり驚きの一幕でした。(続く)